

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年七月十五日發行(毎月一圓十五日發行)

▲本誌事務取扱所 東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一冊) 發行所 東京市淺草區北清島町十四番地編輯發行所 松尾英四郎(印刷人 鈴木日雄(十錢郵税五厘))

念珠ならば小野嘉助店へ
日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙満寺御用達

御念珠各種

弊店の特色は實用を旨とし従來
調進仕り候へば多少に不拘御用
命願上候

京都市寺町通蛸薬師下ル
念珠 **小野嘉助**
電話 中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

布眼 藥 效能、たぐれ目、かすみ
目、ぼし目、くもり目、
ち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホ
ーム等

定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八拾
錢、壹圓、

血の藥 定價壹袋、拾錢、貳拾錢
效能、男女ちの道、産前
産後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣
絶、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、
千葉縣山武郡源村上布田麥百番地
藥王寺

布眼 藥 **本舖 齋藤 日章**
(御注文は總へて下記振替に)
(振替東京第六七九一番)

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 (直に御聯想下
され候儀に候)

京都 三條通烏丸東入ル町
草木本店
電話 中七三五番
振替口座東京一五五九番

東京淺草區三好町二番地
草木支店
電話 下谷三四三四番
振替口座東京二四五六八番

●初も佛具を調製するの誠心なを以て奉事仕候●

佛像佛具 調度所

位牌木鉦 調度所

宮殿幢天蓋 一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
大本山妙満寺
大本山本國寺
日宗各教團

京都寺町四條南大雲院前
舊名「乾清」事 **辻井岩次郎**
大佛師 振替大阪八一五七番
多少に限らず御 電話 下三二五八番
用奉願上候也 ●御用仰せ被下候は、叮嚀深切を旨と致候●

佛像佛具 大販賣所

位牌木鉦 大販賣所

宮殿幢幡天蓋 一式

●各大御本山御用達

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是迄とは一層
勉強仕り莊
製品一式陳
列仕置候

郵税四錢
定價表ハ御一報
次第送呈可仕候

小賣部 京都三條小橋東入南側

三法堂佛具陳列場

長距離電話 東京 貳七七八番
振替口座 東京 貳〇七七番
大阪 四貳五九

卸部 京都市三條通小橋西入
本舖 **三法堂 藤田總治**




(號 三 十 九 百 二 第)

失 言 乎

明治維新後、官憲新を漁するに急にして物質主義の弊に陥り、智識教育を偏重して徳育を輕んじ、其の宗教を視るときは如き一括して悉く假説而して迷信なりとす。於是世人宗教を馬鹿にすること久し。信を教門に捧ぐるもの憤慨に堪へざりし所なり。五十年機會あり。我日生本多師敢然として立ち、獅吼一番、教育萬能の固疾に一ヒを下す、實に近來の痛快事なり。然るに都下の一新聞之を失言と傳ふ是れ却つて失言なり早計なり。之はまだしもなるに、苟も宗教を標榜して立つ雜誌にして『本多師の失言問題』として喧々として一萬萬の痴態をなし以て窃に欣ぶが如き態度をなすものあるは何ぞや。憫なるは彼等己れの何の立場をも知らざる阿呆の物體なる哉。只中に二三共鳴する言議なり亦識るものは識る。夫れ正義の下天下何ものか恐怖すべきものあらん。

當 言 乎

所 輯 編 一 統 町 前 山 白 川 石 小 京 東 所 扱 取 務 事 行 發
▶ 番 三 三 五 三 三 京 東 座 口 替 振 ◀

勇猛精進(續) 大僧正 本多 多生 山根 青村
日蓮聖人教義綱要 僧正 井村 日成 和歌 清岡 長言 選
心本主義 大朝記者 渡邊 霞亭 讀 者 月 旦 統 一 俳 句
佛教の道具立 金 山 猪 助 統 一 團 報 監 督 布 教 其 他

●「統一」誌代改正廣告

●「統一」印刷代も度々値上げをして来たが、其中に下ることもあらうかと辛抱して居りましたが、却つて先月から又々値上げを云つて来ましたが、依つて止むなく去月六月から一册拾三二銭に値上げを致します。

●「集金郵便」(振替口座)を差出します以前には必ず葉書にて御一報申しあげることと致して居ますから、成るべく御用意の上御拒絶之れなき様御依頼申します。又初めの讀者の中には集金郵便を異様に感じになる方もありますが、集金郵便は相方の手数をはぶく最も便利な文明の集金方法ですから、成るべく之を利用したく悪からず御諒解下さい。

本多日生猥下著述

日蓮聖訓要義

全部拾貳巻 各一四六版總クロ 百頁願美本
定價各金壹圓五拾錢、郵税内地十二錢滿鮮廿四錢
第一卷 (既刊)
(一)緒言。(二)法華大綱鈔。(三)法華鈔。(四)法華取要鈔。(五)如說修行鈔

第二卷 (既刊) (六)立正安國論。(七)開目鈔

第三卷 開目鈔全部

●聖語錄

●開目鈔詳解

●東洋文明の權威

●多生日師著書

日蓮聖人の感激 正價壹圓八拾錢
日蓮主義綱要 正價壹圓八拾錢
國民道德と日蓮主義 正價壹圓八拾錢
日蓮主義 正價壹圓八拾錢
修養と日蓮主義 正價壹圓八拾錢

大僧正 本多日生師題字
文學博士 建部遜吾氏序文
北海道長官 笠井信一氏序文
僧正 能仁事一師新著

●法華經要解

四六版四百十頁。總クロ一ス美本箱入
正價壹圓六拾錢送料拾貳錢滿鮮廿錢

法華經の意味を解り易く知りた、是れ皆我日蓮門下の欲求するところでありませ。能仁事一師は通俗講話の大家として夙に其名を知られて居る人でありませが、今回法華經八卷に就て分り易く講義をなされまして新に美装して出版しました。文字は總振り假名つきです、早く法華經の全體が知りたいと思はるゝ方はスグ御注文下さい。

右各書冊取次

東京小石川區白山前町一七

統一編輯所

振替口座東京三三三三三番

山口菜花著

後藤新平論

四六版總クロ一ス美本箱入
定價貳圓送料拾貳錢滿鮮廿錢
未來の首相……今歐米に悠遊せり、彼れ今何を其胸に藏しつゝありや、風雲暗憺たり、疑問の怪雄に對する菜花野人が筆鋒夫れ何を論せるや。

右發行所

統一編輯所

勇猛精進 (續)

本多日生

五 兵と富を以て正義を護る

之を國家の上に移し置して同じ事でも、義を忘れて勇を説く所のものが、所謂侵略的帝國主義となつて、獨逸の如く、人道正義を蹂躪して我愆の爲に兵を起すと云ふことになるのであらう。故に昔から先輩學者が兵を論じ、富を論ずるに方つては、必ず正義を本にしなければならぬと云ふことは、縱横無盡に論究して了つて居る事である。無論富國強兵は大事なことである、國を富まし兵を強くしなければ、國家として自立することは出来ない。故に經濟と云ひ、軍備と云ふは非常に大事であるが、軍備は何の爲であるか、經濟は何の爲であるかと云つたならば、軍備は侵略の爲である、經濟は我愆の爲であると云ふが如き事であつては、到底力ある軍備も經濟も發達するものではないのである。それであるから、富と兵とは大事であるけれども、更に正義がより大切である、兵と富とを以て正義を護ると云ふことが軍備經濟の本義であるのである、目的は即ち正義である。是は從來

我國の學者が、夙に十分論究せられて、最早や明かになつて居る事である。然るにも拘らず今日には所謂三角あたりの跋扈の爲に、軍備論であるとか、或は經濟論であるとか、或は正義論であるとか云ふものが分離してしまつて、經濟を論ずれば唯だ經濟のみを論じ、軍備を論ずれば唯だ軍備のみを論じて、この經濟と軍備が正義の方便であると云ふことを知らざる者の多いのは、實に抱腹に堪へない次第であります。個人にしても、國家にしても、正義に根柢を置かねば、時に於ては、眞の發達は見られるものでない。一時は榮ふるに似て而してその結果は、必ずや失敗に終るものであります。左様な次第であるから、この勇猛と云ふことに就ては、飽までも正義を前提とすると云ふことは、儒教の思想から言ふても無論の事であらうと思ひます。

六 勇猛精進の字解

それで斯う云ふ字の事に就てちよつと辭典を調べて見ましたが「勇」と云ふことそれ自身が、論語にもある通り「勇者は懼れず」と云ふこと、この懼れないと云ふことは、正義を貫くに

方つて困難と戦ふ所の意味である。勇と云ふ一字が元來どちらへ附くかと云ふと、暴虎馮河と云ふやうなものは、勇に似て勇に非ざるものである、勇と云ふ一字が既に正義に勇むと云ふ意味で、義勇と云ふことは、自ら勇と云ふ字の中に籠つて居るのである、又勇と云ふ字は、「勇健」「勇銳」「勇猛」と云ふが如き、何れも正義に向つて進み行く所の力を言ふて居る、それから勇と云ふ字は「果斷」「決斷」と云ふことである、果斷決斷と云ふことは、悪い事をするに就ては出て来ないので、やはり正邪を決定して、正しきに從つて行くと云ふことは、人間の上に於てはモウ當然の事ナンである。どつちへでも勝手に決斷が出来ると、自由意思であるナンと云ふことは、それは三角あたりの言ふことである自由と云ふことはさう云ふ事ではない、人間としての本分は、何時もその人の判斷を制約するのである。自由と云つても人と云ふことが前提である。動物であれば知らんけれども、人と云ふものは即ち聖賢の教にある如く、「仁義禮智心に根す」と云ふて、人は必ず仁義禮智を以て前提として居る所のものである。どつちへでも人間行くものぢやと云ふやうなことは、それは其處に時代が後戻りするるのである、苟も文明を開き、國家を成して、世界共通の人間として尊敬を受けて居る以上に於ては、人間の判斷すべき範圍はモウ既に定まつて居る。故に人間が物を事を決斷すると云ふことは、即ち正義を前提と

して決断すべきは、當然の歸結である。それから「猛」と云ふ字は「たけし」と云ふ字であり、

「たけし」と云ふことは「極めていさむ」と云ふことで、やはり「猛烈」「猛烈」と云ふやうな意味があつて、是も正義に向つて進み行く場合を言ふのでありますから、非常な強い勢ひを示して居るのであります。

國體の精華であると云ふのである。それから「進」と云ふ字は「ちかづく」「つくす」と云ふやうな字で、やはりその極點に達せなければ思まぬと云ふ意味である。「進進」と云つて、進むと云ふことは到達すると云ふ意味で、唯だ進んで途中で引掛かると云ふのではない、その目的に達しなければいかぬ、理想境に到達せなければ思まぬと云ふことが、「進」と云ふ字の義理である。所謂「進歩」「進取」「進進」「進進」と云ふやうな場合に、進むと云ふことは皆それに依つて理想境を實現する所の言葉であります。政治上の議論などに於ても、この頃論議せられるのは即ち精進である、いろいろの政黨が得失を争ふのは、即ち國家經營の上の行動に於て勇猛精進を見ようと、又國家の行動に於て勇猛精進を見ようと、それは何處にも當て欲められる事である。非常に是は良い徳目であります。

七 佛教に於ける勇猛の解

而して佛教に於ては之をどう云ふ風に説くかと云へば、いろ／＼佛教には能く説いて居りますが、丁度今「大集經」と云ふお經を講述し居るので、この中にも深山説いてあるから、一二の適文を擧げて見ようと思ふ。この大集經の中に

は勇猛と云ふことに就て、之を喜ぶ、喜べば則ち勇猛にして能く善を爲すが故に。と説いてあります。喜ぶと云ふことが前提で、それから能く善い事をすると云ふことが、それに續いて居るのである、その喜ぶと云ふ事と、善い事をすると云ふ間に勇猛と云ふものがあるのである。それを喜ばないで、怒む、妬む、怨む、張ると云ふやうな事から勇猛が出て来れば、即ち佛教で獎勵する所の勇猛でないのである。それからその勇猛の次に、社會の破壊、石をぶつける、衝突くと云ふやうな事では無論駄目である、勇猛の後には善き事を爲すと云ふことになければならぬ。その前が喜びで、その後が善い事をすると云ふ間に、勇むと云ふことが活躍する、非常にこの事が巧に説いてあります。前回「自摩女住」と云ふことをお話ししましたが、それが今申してこの「よろこび」である、人間はどうかして不平や怨恨を懷いては駄目である。如何なる境遇に處してもその精神の平和を喪はないやうに、修養を積んで行かなければならぬ。さうして爲すべき事を爲し、勇むべき所は勇んでやつて行くと云ふことは宜しいけれども、何時も精神の安定を喪はないやうにして行かなければならぬ。けれども多くの人は「サウ人間に安心を興へたならば駄目である、寧ろ貧乏すれば元氣を出して働くやうになる、金が少し出来れば直ぐ惰眠を貪るものだ、だから社會の進歩

は生存競争であつて、ウツカリしたら倒されるぞと脅かして、油断をしてはいけないと云ふやうにやつて、始めて人間は動くものである」と言ふけれども、それは餘りに人間を劣等に見た批判である、動物に近いやうに人類を扱ふ所の觀方である。人間の人格を尊重するならば、人間は決して食物に満足したからと云つて、モウ働かないと云ふやうなものではない、豚ならば腹いっぱい食つたならば直ぐ寝てしまふけれども、人間はさう云ふものでない、理想に依つて活動を続けるが人間である、食ふや食はんは依つて尻叩かれて始めて動くもの、之を動物と云ふのである。さう云ふ低き者の事のみを考へて社會の教化を垂れやうとするから、様々なる間違った現象が現はれて来るのである。人間の考が低ければ之を高く上げて、其處に社會の教化を訂正しなければ、逆も駄目ナンである。左様な事を言つて、人間は弱いものだ、横着なものだと云つて、人間の水平線をジツと低く見て行くのは、是は大變間違つた事である。

八 教ふるに道を以てすれば化する

それは教へなければ、如何なる人間と雖も低き者になるけれども、教ふるに道を以てすればみな向上するのが、人間の尊い所である。如何に匹夫野人と雖も、教ふるに道を以てすればみな化するものである。昔有名な伊藤仁齋先生が

追刺に出遇つた話がある、大津街道であつたかと思ひますが、三人の追刺が現はれて、「貴様着て居る着物を説け、刀も置いて行け」と言つた先生泰然として少しも驚かない、着物をすつかり説いでしまつて「横鼻禪だけはやる譯に行かぬ」「それは宜しい」と云ふので、素つ裸になつて汚れた横鼻禪一つになつて仁齋先生悠々として立去らうとした。仁齋先生は御承知の通り町奉行が大納言と間違へて馬から飛降りてお辭儀をしたと云ふ位で、非常に風采の立派な態度の堂々たる人であつた、町奉行が馬に乗つて駈けて来た所が、向ふから大納言様がお行でになつたとと思つて、驚いて馬から飛降りてお辭儀をした、それから能く見ると貧乏僧であつたから「この馬鹿僧者」と言つて怒つて馬に乗つて行つたと云ふ話がある位で、態度風采に於て一種獨特の威嚴を有つて居つた人である、素つ裸になつてもやはり大納言氣取りで、悠然と構へて居た。所が追刺が、乃公達は永年追刺をして居るけれども、大抵の奴は初めは威張つて居ても素つ裸になるとペコ／＼になつて、寒さうに肩をすばめてブル／＼顛へて逃げて行く、その刺がれて後の態度と云ふものが略々相似て居る、彼奴一つ職業を聞いてやらうぢやないかと云ふので、追刺がオイ／＼と呼留めて「お前は職業は何だ」「拙者の職業は人の道を説くものである」「人の道つて云ふのはどう云ふものだ」そ

れを聴きたいと申すのか、それなら貴様のやうに立つて居て物を言ふものではない、物を聴きたければ、ちやんと坐つてお辭儀をして手を突いて、人の道とは如何なるものでありますか、教へて貰ひたいと言ふものだ、さう云ふやうな事を教へるものぢや「フーン妙な職業があるものだナ、一つその職業を教へて呉れ」よし、それで教へてやらう、第一人の道と云ふものは泥棒をして人を素つ裸にするに云ふやうな事をしてはいかぬから、先づ着物をこちらへ返せ、それが人の道と云ふものぢや」と云ふやうな事から段々と説いて聴かせた。それが冗談ではない、冗談で言つたのでは、到底さう云ふ悪人を感化することは出来ないが、所謂誠意正心で、態度を改めて、「夫れ人の道は……」と諄々と説いて聴かしたので、スツバリ改心してしまつた。それから仁齋先生の弟子になつて堀河の塾へ歸つて来て、段々教化をされて後には先生の代講をする位の儒者になつたと云ふことは、是は隠れなき事實である。追刺野郎と雖も化するに道を以てすれば、やはり人の人たるべき道に商賣替をするのである。然るに今に至つて、天下は滔々として日に動物に近づくと云ふこと、實に今日の人間が決心が足らぬと思ひます。どうしても文明を立て直ほさんければいかぬ、人間の價値を立て直ほさんければいかぬ。風教の方針を大いに高めなければいかぬ。

人が墮落するのを當然なりとするに於ては、如何なる施設を爲すも結局は即ち窮せんければ落着く所は無い。現代は滔々として日に非なるが故に、絶望のやうに思ふけれども、今言ふ通り泥棒でさへも化するに道を以てすれば善に進むものである。又佛教に説いてある中にも、随分悪い奴がある、人の子供を奪めて生活をやるやうな奴もあるし、人殺しをするやうな奴もあるけれども、皆な化するに道を以てして教化せられて居るのである。故に私はどうしても人間は平和なる精神を本とし、正義の精神を本として其處に勇んで善を爲すと云ふことに、ならんければならぬと思ふのであります。

九 佛教に於ける精進の解

それから「精進」と云ふことは、毘梨耶波羅密と稱して、いろ／＼尊いことがある。又五根と稱して信根(信仰)とか或は慧根(智慧)とか云ふものと相並んで精進根と云ふものがある。根と云ふのは儒教で言ふ「仁義禮智心」に根すと云ふと同じで、固より人間の性能にあるものが發して來るのである。そこで精進根と云ふて、人は元來善惡を選んでその善きものを採り、輕きものより重きもの、低きものより高きものと云ふ向上性を以て、その善き事を選んで進まうとする性能を有つて居るのが人間ナンである。この精進の性(即ち精進根)と云ふものは、人間の資

格としては前提としてあるべきものである。善でも惡でも構はぬと云ふやうな事は、子供でも決してさう云ふ譯のものではない、子供に向つて「お前馬鹿か賢いか」馬鹿だらう」と云へば屹度おこる、やはり自分は賢いと思つて居る「お前弱蟲だ」と言へば直ぐおこる、「お前は強い」と云へば喜んで居る。即ち善きものを選んで進まんとする性能は、天然に有つて居る所のものである。故に精進と云ふことは五根の一つとして非常に尊いものである。それはお經にはいろ／＼に説かれて居るが、濁れる心を打破る爲に働くのが精進である、人間の心には割合に汚れたやうな濁つたやうな精神がある、その所謂心中の賊と云ふ奴を撲滅する爲に奮闘するのが精進ナンである。又外に向つて諸々の善い事を求めて、即ち善を選んで爲さうとするのが精進根である。又一切の哀れな者には施與をしやう、精神的にも物質的にも、能く救済をしやうとして、奮闘するのが即ち精進である。それから又世の中の人を樂しましめる爲に、休息をせずして而も疲勞を感じないでやつて行くのが精進である。それから進むと云ふ時に於ては必ずや善い事をする、悪い事に對する時分には決して元氣を出さない、善い事に向つた時に勇氣が出て來る。是非非常に大事なことナンで、善を選ぶと云ふ時に元氣が出て來ると云ふのでなければ詰らない、例へば日本軍人で言つたならば我が皇國に敵をなす所の賊軍であると云ふ見究

めが附いて、而して初めて之を粉砕しやうと云ふ大和魂が其處に燃えるのである。彼は堂に哀れなる薄命者である、例へば絶海の孤島に漂流して行方を失つて居る者であると云ふことを見定めた時には、それが假令敵國人であらうとも之を救済する所の慈愛の精神になつて、日本の海軍は之を救ふであらう。であるから勇氣を以て進み行く場合、慈愛を以て進み行く場合、みな悉く善と云ふものと一致しなければ元氣は出て來ないと云ふことが、精進の力である。悪い事に元氣が出て進み行く、夜も寝ないで博奕を打つて居ると云ふやうな事は駄目である。博奕と云ふやうな事になれば直ぐ居眠り始める、僕は博奕は嫌ひだ」と云つて欠伸をする、併し善い事になつて、所謂社會國家の爲であると云ふ事になれば、睡つた眼もパツと開いて來ると云ふ所が、この精進の前提でなければならぬ。何でも構はない、元氣を出せと云ふやうな亂暴な事は俗論であつて、道徳上の問題にはならぬのである。詰らぬ無駄話を始めれば直ぐに元氣が抜けて居眠りをする、或は「左様なら、御免」と云つて歸つてしまふが、有益な話の時は何時までも眼が光つて居ると云ふやうにならねばならぬ。所が世間は往々にしてこの反對である、詰らない話をして無益な事を言つて居れば、ワイ／＼言つて騒ぐが、イザ大事な話になつて行くと云ふと皆な黙つてしまつて居眠りを始める其處に於て人間の進むと進まざるが分るので

日蓮聖人教義綱要 (第廿三回)

井村 日 咸

第七章 發心

第三節 結縁の大事

我等一度、佛子の自覺を得、向上の途に上らんと志し、其目的を菩提の彼岸に定めて、茲に其第一歩を運ばんとするに至つたのであるが更に慎重の態度をもつて充分の考慮も費さねばならぬ。大事がある、それは結縁の大事である。輕々に看過してはならぬ大切な事柄である、觀心本尊抄に

ぬ、遺文に王女に譬へられたるは我等の佛性である、我等の佛性は外來の誘引に依つて何時でも活動を始める、王女は何時にても子を生むの素質は持つて居るが、相手なしには子は生めない我等の佛性も自分一人では活動の力を有しない(一人で働く程賢明ではない)必ず之を導く相手を要する、そこで其相手の選擇に充分の思慮を廻らさず、何でも御座されれば其處から生れる子は夫次第でつまらぬものも生れ來る若も王女が畜生の種を宿せば畜生の子であり、王様の種を始まば王子が生れるのであるから、其夫の資格審査が大切な事となるのである、我日蓮主義に於ては之を種熱説の法門と言ふて専門的には中々面倒な意味もあるのであるが、結局は我が向上せんと志す第一歩を誤らぬ様にせねばならぬことを教へたのである、現今の日蓮主義者の中には此法門を教主の方へ持込んで論じて居るものもあるけれども、此は教主たる佛の御身の上に関する問題ではない、我々が教を受け

る始中終を種熱説と云ふたのであつて、我々の方には下種の利益を受ける衆生、説の利益を受ける衆生と云ふ遠目はあるが、佛の方には下種の佛、説益の佛と區別すべき筋合のものではない、我等の教主を何人も拵へねばならぬと云ふ様な教義の立て方は佛法の原則に背いたものである。一佛境界に二の尊號なしと云ふ法を破ることは出來ない、之を破れば眞言亡國の鐵鎚は直に汝が頭上に見舞ふであらう、教主に關する事は前編教門論の中に悉してあるから御領解の事と思ふ故再び申上ぐる必要は無いが、議論としてそんなことを云ふものもあると云ふこと大御承知に相成つて居ればよい、我等はそんな不徹底の議論に累せらるゝ必要は無い、斯様に一面には種熱説の法門を佛の上に迄及ぼして論じて居るかと思ふと、反面には全然此法門を無視して居るものが居る、即ち本尊を輕視して雜亂動請を平氣で許して居る一類である、お前の亭主は誰でもよい、氣に入つたものでよい、今日は帝釋、明日は七面、其次は長樂様、極端なる自然主義者の態度である、此が日蓮主義者と稱して威張つて居るのだから驚く、よくも／＼斯う迄間違ふたものであると憤慨する外はないのである。餘事は扱て置いて、我々が結縁の大事とは、本門壽量の大本尊と結縁することである、我等の大切な夫として本門の本尊を見立てることである、此選擇を誤つたならば我等は到底信仰の目的を達することは出來な

い、聖人開目抄に示して曰く、俱舍成實律宗は三十四心斷結成道の釋尊を本尊とせり、天尊の太子迷惑して我身は民の子とおもふが如し、華嚴宗眞言宗三論宗法相宗の四宗は大乗の宗なり、法相三論は勝應身にたたる佛を本尊とす、天王の太子我父は侍とおもふがごとし、華嚴宗眞言宗は釋尊を下して盧舍那大日等を本尊を定む、天子たる父を下して種性も無き者の法王の如くなるにつけり、淨土宗は釋迦の分身の阿彌陀佛を有縁の佛とおもつて教主を捨てたり、禪宗は下賤の者一分の徳あつて父母を下るが如し、佛をさげ經を下す、此皆本尊に迷へり、例せば三皇已前に父をしたらす人皆禽獸に同ぜしが如し、釋尊品を知らざる諸宗の者は畜に同じし不知恩の者なり乃至釋尊本の佛を知らざる者は父統の邦に迷へる才能ある畜生とかけらるなり、乃至眞言華嚴等の經々には種熱説の三義名字すら猶無し、何に況んや其義をや、(遺七九二)と、本尊の選擇を誤るときは自分の眞實の父を知らざるものと爲つて不知恩の畜生であると云ふことを論に相成つて居るのであるが、前に掲げた本尊抄の意味と同じである、我等は本佛釋尊に對して發心し結縁して、本佛の御種を宿して菩提の子を生ねばならぬ、素性も分らぬ佛の種を宿す様な事があつては無上菩提の子を生むと云ふことは出来ない、本門の本尊に向つて歸依渴仰を捧ぐる處に、我等の信念は發作し

第八章 修行

第一節 修行の要旨

一來るのである、此信念の發作を結縁の大事と云ふのである、斯くして、本門の本尊即ち本門常住の三寶様に對して發作した信念と、本尊より垂れらるる大慈悲とが力強く結付けたらぬ處を下種と云ふたのである、此信念を永久に維持して佛身を成就する曉まで深く強く持續するのが熱益である、信仰成就して佛果を満足するものが熱益である、三益ありと雖も最初の結縁が大切である、始の結縁が正しくなく、野合的のものでは永久に累と成る故に最初の一步に大事を誤らざる様、本尊の選擇に充分の考慮を費さねばならぬ、本尊の選擇を外にしては種熱説の法門の問題は無いのである、此義に就ては佛陀の三徳有縁の意義を参照して考へたならば一層明了と爲る譯であります、要するに種熱説の法門に就ては本尊に關する考慮が充分に行届いて其正確を得たならば、大事を誤らざることを得るのであります、現今の教義上の不徹底は其多くを本尊に對する誤解に發して居るものと云ふてよいと思ふのであります、故に此機會に於て一層深く本尊に對する研究の充分ならんことを希望して置きます。

つて居らるゝが、扱て如何にして進發するか、徒歩か、乘車か、先づ進發の方法を取定めねばならぬ、我等は直に實行に移らねばならぬ、日蓮聖人示して曰く、行學の二道をはげみ候べし、行學たへなば佛法はあるべからず。(遺五六四)と、行と學との二面は常に偏傾すべきでない、佛法修行の上に注意すべきは此二面に對して適當に調節を保つて行くことである、行に偏して學を怠れば、其行は次第に邪徑に陥入る様になる、學に偏して行を輕すれば理解のみ明かにして實行が伴はない、天臺大師は玄義の中に此點に關しては數々説めて居らるゝ處がある、佛道修行に志すものは充分の注意を要することである、大論に開慧の四句分別と云ふことがある、聞とは學解である、慧とは實行であるが、聞有つて慧無きは大明の中には燈あれども照すところ無きが如く、慧有つて聞無きは大明の中には目あれども見る處無きが如し、共に實相を知らず學問文で實行が伴はぬのは、晝日中燈を點して居る様なもの、實行力は有つても學問する處が無ければ暗闇の中に目を開いて居つても何も何の役に立つものでない、又、聞無く慧有るは所設受くべし、開慧二つながら缺けたるは人の形を爲した

牛に外ならぬ、開慧二つ揃へるものこそ其言ふ所行ふ所信するに足るべきであると言ふてある、我等は開慧二つながら得べく努力せねばならぬ、天臺大師は偏聞偏觀の二失を擧げて論ぜられて居る、我々の爲に大に參考と爲ること、思ふ故、左に示さう、華嚴に云く譬へば食竊の人の日夜他の寶を數へて自ら半錢の分なきが如しとは、偏聞の失なり、下の文に云く未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證せりと謂ふとは偏觀の失なり、

果となり行惡道を牽くなり示されたのである、偏聞のものを跛者に譬へ偏觀のものを盲者に譬へられたこともある、跛者は目と口は達者だが歩行に堪へない、一步も進むことが出来ない、盲者は足は達者だが進むべき方向が明かでない、何方も不具者である、目と足と揃ふて本當の一人前と言はるゝ、故に智目行足到清涼池

と此文は偏聞偏觀の二失を擧げたのであるが、次に其意味を説明して、視聽聽散すること風中の燈の物を照すこと了かならざるが如し、但耳より入つて口に出づるを責び却て心を治めず、自らはとして人を陵ぎ見を増し非を増す、双を把つて自ら傷く解惡道を牽く、其觀を習はざるに由てなり、偏聞の失は但耳より入つて口に出づる丈で、實行伴はざれば心の病を治せず却て惡見を増長するの結果を來たし、解了却つて惡道を牽いて苦界に隨せしむとなり、偏觀の結果は、若觀心の人は心に即して是なり己、則ち佛に均しと謂ふて、都て經論を尋ねず増上慢に隨す、此則ち炬を抱いて自ら焼く、行惡道を牽く、聞を習はざるに由てなり、偏觀の失は増上慢に隨するなり、教に隨順せず、我見に隨ふが故に觀却つて邪觀に陥るの結

現代の日蓮主義者の中に又此失に陥つたものが澤山ある、或ものは即身成佛を骨張して宗教信念の何物たるを解せざるあり、或ものは題目萬能の思想に囚はれて、精神の修養を志さざるものありて、偏聞偏觀の失具さに顯はれて居る様に感ぜらるゝ、聖人の教義を信するものは願みて其弊に陥らざる様心掛けねばならぬと思ふ「行學たへなば佛法あるべからず」との聖訓は座右の銘として片時も忘れてならぬことであると思ふ、斯様に我等は常に如來の教法に開いて、其心眼を開き、其進路を踏誤らざる様に致さねばならぬ、扱彌と其進路を定めて發足致す事に就いては如何なる方法で進むか、佛法には其方法が二途に爲つて居る、其一是自力である、法行と云ふ、徒歩主義である、其二是他力である、此を信行と云ふ、乘車主義である、徒歩と乘車、其難

易速は自ら明かであるが、普通の教相では法行は利根上智のもの、取るべき行法、信行は鈍根下智のもの、行法と云ふことに爲つて居る處から、法行を重んじ信行を輕んじた様な氣味に爲つて居るのである、此が佛敎をして哲學的方面に發達を促して宗教的方面には聊か物足りぬ様な状態に爲つた最大原因であらうと思ふ、佛陀の根本教義には決した法行を重んじ信行を輕んじた様な思想は顯れて居らないが、後代觀念系統の教義の宗旨が發展した爲めに自然信行が輕視せらるゝ様に爲つたこと、思ふのであります、宗教としては、信行に依つて佛の慈悲力に乘托せねばならぬことは申す迄も無き事でありませぬ、一時の變態として法行の思想的修行を主とする様に爲つたので、此は支那に於ける佛敎の特徵とでも申してよいと思ふのであります、日本に發達した佛敎は主として信行に依る純宗教的方面に進んで居る様に思はるゝので、此が佛敎の眞面目であらうと思ふ、特に日蓮聖人の御教義に於ては純正宗教として専ら信念行を鼓吹せられて居るのであります、其意味合が聊か違ふて居る、時に天臺附順の説として信行を輕く見られた場合もあるが、此は聖人の本意ではない、持法華問答抄に上根上機は觀念觀法も然るべし、下根下機は但信心肝要なり(遺四七〇)唱法華題目抄に愚者多き世なれば一念三千の觀を先とせず、其志あらんものは必ず習學

してこれを観ずべし。(遺三四一)
 の御文の如きは愚者の爲め餘儀なく信行を取るが如き仰であるが、天台の説に附和したる假説に過ぎない、佐渡已後聖人の本懐を説示せらるる場合には決して信行を輕じて觀念を重ぜらるる様なことは仰せられて居ない、天台主義は其教義に於て自己中心の一念三千論であるから、其立場に於て觀念の行法を取るより外に途がないのであるが、日蓮聖人の教義は佛界緣起論で宇宙の諸法は本佛世尊の悟上より起用したるものと論ずるが故に、彼の觀念の如き迂遠なる徒歩主義を行法とする必要が無い、今我等が信ずる壽量顯本の大教義は一切を擲して本佛大慈悲の中に包容して刺す處なし、我等一切衆生も本佛の愛子として其覆護の下に慈育せらるるが故に、我等は直に本佛の慈悲に乘托し得るのであるから、何等自己の努力を費すの要は無い、本佛大慈の車は我等を運載して涅槃の城に達せしむるのである、此を經に
 一心欲見佛不自惜身命時家及衆僧俱出鷲鷲山
 と言ひ、又
 是好良藥今留在此汝可取服勿憂不差
 と説いたのである、日蓮聖人は本尊抄に
 佛大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此珠を
 裏みて末代幼稚の頸に懸さしめ給ふ。
 (遺九四九)

具足す、我等此五字を受持すれば自然に彼因果の功德を譲り與へ給ふ。(遺九三八)
 と云へるは、我等が信行の意味合を御示し下されたのである、日蓮主義の信行は、利根なれば法行、鈍根なれば故に信行と云ふ様な相對的の信行では無く、佛陀の眞深の護持は利根鈍根共に測量すべき境界にあらざるを以て一向に信心を以つての外に入ることの出来ないといふ絶對の信行を以つて其修行の方法とせられたものである、立正觀抄に
 三諦とも云ひ、三觀とも云ひ、三千とも云ひ不思議法とも云ふ天台の已證は天台の御思慮の及ぶ所の法門なり、此妙法は諸佛の師なり

心本主義

日蓮聖人傳著者 渡邊霞亭

近頃頻りに心本主義と云ふ事が高調されて居ます、夫れは何でも西洋から、渡來した事のよろうで、いかにも珍らしく新奇な説の如く猫にも杓子にも口にされるようですが、日本では二千年も前から云ひ古されて居る事です、西洋では珍らしい事か知りませんが、日本では古い主義です、日本の皇室では「民は國の本なり」との御主意をもつて、政治の根本に爲すつて居らつしやる、人民どもから蛙の啼くように驚々

て只今高調されて居る心本主義の極意と少しも異つては居ないのであります、全體人民の口から「おいらは國の本だぞ」など大きな聲で叱呼するのが日本の國情には適して居ないことであると我々は信じて居ます、それは武士道の權化であり、活大大學者であり中朝事實の著者である山鹿素行先生が「民之本は君に在り」と喝破なされて居る、之れが日本人の心本主義に對する感念でなくてはなりません、さよう、確乎した感念でなくてはなりません、皇上からは「民は國の本なり」と宣はせ「民の富は朕の富なり」と勅らせ、人民からは「民の本は君に在り」と高唱する處に、君臣の美しい情誼は流れて居ます、外國で云ふ正義人道とは異つた、すつと進歩した完全無缺の正義人道を持つて居る我國では、人民は皇室の赤子であり、皇上は人民の父母でありますから、七千萬の同胞は悉く皇上の子であり、陛下は七千萬人の父上であり母上であります、日本國はさうした慈悲の厚い皇室を親と戴いて、その御威稜の下に忠實な働き、各自が天分に順應した忠實な働きをするのを、無上の光榮とし、名譽とします、皇室の御榮は即ち人民の榮であると思ふ、唯一人道を踏み違へる者もありません、そこに日本の美しさはあります、光輝はあります、使命はあります、さうした國柄に生を享けながら、外國傳來の心本主義、實質に於ては古來から行はれて居る我國の心本主義よりもすつと劣つて居る

る—にかおれるのは耻辱であらうと思ひます今さら事新しく驚々と騒ぎ立てる必要は毫も無いと思ひます、櫻は日本特有の花であります、さうした立派な花を持たながら、その花よりも劣つた夫れに似た花が西洋から渡つて來たと云つて直ちに心を移すような者があつたら世間は何かと云ふでせう、日本人として考へねばならぬのは、此の點です、わたくしは今のところ、國の生へた心本主義を研究するよりは、心本主義が研究し高唱して貰ひたいと思ひます、民は國の本、心は人の本です、心が不健全であつたら、その人は眞個の人ぢやありません、心本主義！心本主義！わたくしは此れに依つて思想界の頹廢が救ひたいと思ひます。

佛教の道具立

法華信者が手取り早く看取せん
 とした佛教の研究概要の續

金山猪助(寄)

前段序正流通の看察法で壽量品の正意であることを知れば信者としての把持分別は事済とも云へるが、しかし佛學者としては種々の此の愛に來るまでの舞臺面の道具立を知らねばならぬらしい、簡短に其の四五を左に羅列して見やうそれだけでも忙がしい今の世には自らホツと吐

息するのは我ながら意氣地のない事だ、でも之が所謂末法根柢の薄い爲でがなあらう。
 釋尊出世以前にも外道、イヤ哲學者、イヤ求道者、何と云つてよいが兎に角斯う云ふ種類の學究家？波羅門？が小六ヶしい道具立を並べ立て、如何にしたら達道せられるか？研究されたのであつた。三界欲界、色界、無色界だとか五大(地水火風空)だとか、六根眼、耳、鼻、舌、身、意だとか、須彌山とか、六道輪廻とかいふやうな説があつて、釋尊の阿含部は即ち從來の波羅門説に調節を與へた好便説だとも聞いた、果して然らば釋尊は之を因襲し應用し併せて大乘を説く基礎の底ならしとしたのであつたらう釋尊が波羅門系の學者たる二乘(聲聞、緣覺)を到るところで嫌忌されて居らるゝところを見ると屍理窟に浮身をやつして居た此の一流の道具立屋には流石の覺者釋尊も此を擲げ出されたものであらう、いかに其の手に終へない連中であつた事がわかる。
 苦集滅道は小乗部の釋尊の一貫した説題であつたが、矢張り聲聞衆を誘引した苦心の様は其の道具立の七面倒なのに分る。苦集滅道は四諦と約名してあるが、苦とは六道(地獄、畜生、餓鬼、修羅、人間、天上)の生死觀で、凡そ此の六道が其の當時に於て學究者の見た世間の依正(非情、情)の正情として疊きて居たのであるらしい。集とは見惑思惑で、六道の流轉の因果の力とでも云へやうか、滅とは苦集を一轉機せしむる道

具立である。道とは戒定慧や、度、斷、學、成の四求誓願、色受想行識の五蘊等が道具立となつて八正道に進むといふのである。八正道（正見、正思惟、正語、正業、正精進、正定、念、正命）とは一口でいへば正しい心の安住と行爲とに依つて安心立命するといふのである。以上の如きは、大膽な私の約言であるが、若し之を細かに云へば日が暮れて私の研究せんとする趣旨は前途遠く甚だ心細くなるのである。ある坊さんが法數を指して佛敎の基礎だから云々、成程基礎に相違ない、基礎だと云へば辭書も字數も皆基礎だ、イヤ天下基礎ならざるものはない、之を一々覚えて……記憶してをらねば佛敎徒の資格がないやうに思ふのなら佛敎廢すべきである。（其坊さんも其法數の百分の一も記憶しては居るまい、我輩が若し此坊さんを試験したらスグ落第さしてやる）大義に前する、分別する、義立する、我々は斯う云ふ意味に於て特に道具立を排斥するものである。斯の如き道具立は法華經の本舞臺では骨子たる道具立とはなつては居らぬ、只本舞臺に這入る最初説の出發であると思へばよい。それから縁覺に感業苦の關係として十二因縁（無明、行、識、名、六入、觸、受、愛、所、有、生、老死）を説かれたが、これとて細かな輪轉式な理屈であつて、最後妙法の大法理には一樂味の利目である。苦集滅道とか十二因縁とか佛敎の説明式には入用だが、かゝる説明式は結局略式で儀禮の關門が通れぬ事もあるまい。なるべく簡短なところ

で便宜なところで、道具立の少ない言葉で達意に大きく云つた方が我々片々たる信者には便利である。

菩薩の爲の五度（布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧）は菩薩行として大乘には中の利く修行の基礎であるが、これとて釋尊在世の時とは兎に角末法の現在には必要はない。根本的法華式な大戒から云へば皆之等は打ち切つて終はねばならぬ。這んな詮鑿ばかりで往たり戻つたりして居ては一生を得るところなく終らねばならぬ。マア参考の爲に其名目を知つてをけばよい位なものである。若夫れ二十五有依正二報だとか、三十四心斷結だとか綺麗に云つて組織俗語でいへば道具立を開陳したら、一面には佛敎の組織の微細に驚くと共に、又一面には馬鹿々々しくも感ずる。隱居になつたら研究する餘暇があつたら調べるもよからう。

茶に道具茶がある、手前茶がある。佛敎の道具立で佛道の奥行を誇らんとする輩は茶の道具茶と手前茶を兼ねたる如きものであらう。這んな事を一信徒の身分でシャベリ立てると或は叱られるかも知れない。

△金山猪助とは何んな人か

這んな手紙が舞ひ込んだ「宮武外骨君が「赤」を出して日蓮主義の宣傳とは其の餘りの意外に一寸驚いたが曾て宮武君と共に滑稽新聞に奇矯の筆を揮つて天下に鳴つた金山君が突如「統一」に一信徒として現はれたには是亦奇蹟つた。金山君とは何んな人か一度初目にかかりたし記者君御仲介を乞ふ。堺市信風子」と手紙其儘を載せて仲介に代えます（一記者）

機微譚語 山根青村

八八、商事の秘訣

藤田東湖先生の門人に關戸某なる者あり、水戸下市なる屋號松重と云へる商家の婿となる、慣れぬ業務とて入婿後未だ數年ならざるに、夥しく城下の諸士に貸込み、再三再四督促を嚴にするも一向に纏まらず一日先生の許に至りて調を請ひ其次第を語り教を乞ひしに、先生其言の終るを待たず直ちに某に謂て曰く、何も造作なきことなり悉皆先方へ呉れて仕舞ふ迄の事なりと、某性素と迂直心竊かに以爲らく流石に尋常ならぬ先生のことがなれば教を請ひなば、亦何とか良思案もがなと思ひしに、案に相違の教命、呉れてよかるべきものならば此處まで足を運ばじものをと、呆氣に取られて茫然と坐し居たるに、先生徐ろに又口を開き、汝の顧客たる諸士は祿高何程頂戴し居らるゝ

やと何氣なく問はる、儘に、某々は若干石の御扶持なりと事明細に演述す、先生再び曰く、夫程の祿高より一年中の一家内の諸費用を除き去らば、大約何程位餘るべき歟とあるに、手一配の御暮しならんと答ふ、先生更に語を續ぎ、汝も亦迂なるもの哉、そんな人に貸して取る氣で居るのが第一の誤想なり、取りたくも取りやうなきにあらずや、今呉れて仕舞へると云ひしは之が爲なり、最初から呉れる氣ならては決して貸されぬ筈なり、汝達商業と云ふ事を知らずに商賣するには困り入るなり、總て商賣を爲すには其得意先の資力を計りて取引するが第一なり、貨物を賣付けのみが商賣にはあらず、予をして商人たらしめば、汝の居る下市の一町内は残らず白壁土蔵と爲し呉れんものもありたるに、其人夫に悟る所ありて先生の教の如くす、然るに各負債主中

○兄弟の情

多田、磯部二氏の奇特

横濱本宗信徒多田房太郎磯部滿二氏の實弟捨雄氏は過船逝去されたが、兩氏は左の書面を寄せられたれば本誌は欣んで之を領納したり、尙本誌五十部を施本されたり、

拜啓（中略）陳は舍弟捨雄義今同廿有七歳にして何等社會及び國家に貢



献寄與する所もなく逝去仕候事は吾等の遺憾に堪へざる所に御座候。就ては甚だ乍些少金三拾圓也追善供養中へ寄贈仕度候、是れ所謂貧者の一燈と申べき微志に過ぎず候へ共幸にも布教宣傳の一端に資するを得ば彼も亦以て冥すべしと存申候卒微意察御嘉納被成下度候云々

には、其所置に感動せる者出て來りて、呉れたる證文は更に金となりて返り來り貸金の半分程は奔走せずして暫時に辨償を得たりと云ふ。（今古雅談）
商業には秘訣あり、敢て貨物を賣る許りが商賣にはあらずとの警句、一代の學者東湖先生の口より出づ、絶妙談に價ひせずや。然り單に賣るのみが商賣にあらず先生の言に聽いて、洒然と今迄の證文を卷き呉れてやつたる男らしき所業に相手方の良心の制裁まんざら費ふ譯にも行かず、さてこそ半分は勞せずして還り來りしなり、豈た々商業としも云はんや職に法教師の聖事にたづさはるもの、ただ演說教の安賣を爲すのみが能にあらざ、名聞利養の邪念をさらりと捨て、身親ら絶対の信仰に住し、如何にしてか相手方の佛性を控發すべきとの志念なかるべからず、又在家の人も信仰意識漠然として、無上甚深微妙の法をたゞ唱へるのみが能てなし、口に唱へ心に念じ身に行ふ、开處に絶大の利益はあるなり。
聖語、法華經を餘人のよみ候は口ばかり言葉ばかりは讀めども心はよ

まず、心はよめども身に讀まず、色心二法共にあそばされたること貴く候へ。(土龍御書)

八九、天心の明月

星月夜鎌倉山の片邊にいと富貴に暮せる柳瀬某は、死に臨んで三郎四郎と呼ぶ甥兩人を枕頭に招き、汝等兩人は予が兄の子なれば切ても切れぬ叔姪の間柄なり、予は今餘命旦夕に頻せり、相續の悴には全財産を委したり、今は記念として汝等に金五百兩づゝを興へん、兩人睦まじく此金を商業の資本として末榮えよと諭げたりける。兩人涙ながらに其金を押戴きて歸路に就さしが、時正に日暮れ通行稀なる片田舎の里道を歩めり、兄を懐中にせんと、弟亦同じ思ひに沈み、兩々一語なく形影相踏み來る、折しも雲霧れ夜静かに中空闊々たる月さやかに輝き渡る、宛かも汝等馬鹿者何の悪思惟をなすかと嘲り笑ふものゝ如し、兄忽爾として歩を止めて懐中の五百金を地上に抛ち、愛する弟よ予は慾念に驅られて汝を

害せんとの邪念を起したるを愧づ、思へば此金は不淨財なり、今汝に與ふべし提へ去れと、弟亦懺悔して曰く、野生も亦御身と同じく惡魔の囚はれとなりて、すつての事御身を害すべく思惟したり、煌々たる明月に對して面耻かしき限なり、兄上此金をと五百金を地上に投じて拱手慨然たり。(閑窓夜話)

人各々良心あり、前非を悔ひ改むれば其處に佛性の煌くもの、亦美談ならずや人は慾の動物なり、貪慾瞋患愚痴之を三毒の煩惱と云ふ、之を放縱にすれば世は忽ち餓鬼修羅畜生の劇劇を演出す、而も不斷煩惱不離五慾は大乗の教義なり、消極的に慾を斷じて枯木死灰となることを教ふるものにあらず、要は適當に之を制せよとなり、之を善用せよとなり、道義の制裁信仰の流露之を善化し之を美化して、三毒則三徳と轉用せよとなり。世に金錢ほど重寶のものなし、而して亦金錢ほど罪惡の伴ひ易きものなし、一念慈に動けば「金錢に兄弟なし」との「世諺を實にして、破倫悖徳の大罪人」となりと共に、正義のさゝやかに醒め良心の命令に従へ



山家夏月

子爵 清岡長言選

- 天 千葉縣八日市場 並木うめ
- 山里は清水のおとも涼しきにすゝしさをふる夏のよの月
- 地 丹後國 廣岡 圓
- ほととぎすこゑもさやけき山里ののきばをてらす月のすゝしき
- 人 千葉縣 春日よし子
- 夏の夜の月はいつみにさす影の涼しくする山の下の
- 入 選
- 魂合へる友を訪ひ來て山里に涼しき夜半の月を見る哉 靜岡縣 佐原 弘風
- 松が枝にかゝれる月のさやかにて夏をよそなる山かけの庵 千葉縣 岡本 琴子
- 月かけのさすにまかせてみ山邊のいほり涼しき夏の夜半かな 栗 鴨 園田 照子

ば、俯仰天地に愧ぢざるの眞人間となる。人生金錢の取扱ひ心すべき事なりかし。

聖語、轉迷覺悟は行者の所作により三千三諦三身の理體は全く人の所作にあらず、只是れ本有なり、○迷ふが故に衆生と云ひ、是を語るを佛と云ふなり。(地在一念抄)

讀者月旦 三

戸谷好雄師

戸谷好雄といふは顯本法華宗の僧侶である。位(?)の低い人である、位とは階級の云ひであるが、其の位は低くても僧侶としては實に模範的の立派な人格者(布教僧として)である。僧侶と云へばテラ(所謂寺)を聯想するが、其の寺の飯は喰はない、九尺二間の裏長者に一廓法城を築いて、人力車夫となつて働く、餘暇を作つては布教をする。勞力で人を車に乗せ、心力では法華の大車に乗せる意氣込は尊むべきものである。江戸川の法華僧

の建設法「實に之は戸谷君が熱血の口輪に反響した評判であるのだ。頃日は家内中て手職を行つて、そして半ヶ月働き食糧が出来たら半ヶ月は例の江戸川に立つて辻演説に法華の幢幡を翻して居るのである。之こそ眞に力の布教であらう。

池澤日晷師は義侠的な氣風の人で、眞面目な先輩僧である。戸谷君に法衣を贈られた、僧侶が僧侶に供養をする既に奇特である。而して之を僧侶から供養された戸谷君は實に名譽とせねばならぬ。かくて法華信者の誰彼が彼れに對つて相當の保護(保護と云つて失敬なら何ともよいが)を加へ彼をして眞に愉快に活動さすべく奇特者の現れんことを冀望するのである。併せて宗廟からも低い位を高く、イヤくらいよりも何とか布教費の幾分の支出を冀望するのである。彼は生ける眞の「お上人」である「師」である、かゝる人が我讀者の一人であることは喜びに堪へぬ。



- さやかなる月の光りにおくられてすゝしくかへる山の下庵 大阪 池田 貞
- 夕されば青葉かくれに涼しくも月ぞさし入る山の下のいほ 栗 鴨 園田天津哉
- 涼しくも柴のいほりの暮れそめて青葉かくれに月そさしいる 栗 鴨 園田 白菊
- 人とはぬみ山の庵にさす月の涼しくする夏の夜半かな 栗 鴨 園田 鐵蕉
- 人とはみ深山の庵にたゞひとり見るも涼しき夏の夜の月 千葉縣 岡本榮次郎
- 静かなる深山の庵をたつねきてすゝしき夜半の月を見しか 千葉縣 戸田 浮葉
- 小山田の青田波よる涼風に露ちるみえて月そきらめく 出雲國 石橋 芳夫
- 茂り合ふ木の間かくれにすゝしくも月そさしいる山の下の庵 千葉縣 吉井 たいけ
- 薄雲はいつしか消て奥山の我處でらす夏の夜のつき 千葉縣 伊藤 泰園
- よし野山峰の松はら影もりて軒端すゝしき夏の夜の月 市外 立川 金峰
- 遠かたにましろの聲も聞えつゝ月に静けき山の下の庵 大阪市 長尾翁之助
- 俗しくも月に幸ある我處は夏としもなき山住居かな 千葉縣 夏目 蓬水
- 蚊やり火のけむりはくまとなりけり月を友なる山の下のいほ 木 所 勝田 宜和
- 清水湧く音もきこえて山里はあは葉にやとる月の涼しき 綾部町 大槻助次郎
- かやり火の煙りたえ行く山庵の軒端に月のかた

統一團報

山武統一團教況

四月二十三日 横芝町公會堂に於て、團員たる萩原善左右氏の發金にて講演を開く、聴衆約五百、講師は左の三師にて盛會なりき。開會の辭、山武郡視學、片岡小五郎縣嘱託、岡田博道、本多日生現下。
四月三十日 山武郡正氣村幸田小學校に於て、青年團の依頼に依り、思想問題に就て、成島日衛講演を爲す。
四月九日 午後一時よりは、團員、二等軍醫榎栖常吉先生、今回滿洲より歸征せられたるを以て、之が慰勞を兼ね、講演を開き、榎栖先生の『滿洲視察談』並に成島日衛師講話ありたり。
四月九日 午後七時より、大網町に於て御書讀會合發金にて、『釋尊降誕會』を開く、栗原顯有、成島日衛、竹内無着三師出席す。
四月十日 横芝町大多和氏宅に於て、講演を開く、聴衆百五六十名、講師成島日衛、竹内無着。
四月十二日 正氣村家徳、團員野老常吉氏宅に講演を開く、野老氏は熱心に同志をかりあつめ、月壹回宛開會せらるゝは混中の芬陀梨華、誠に敬すべし、午前一時より成島、竹内兩師の講演。
五月一日 東金町川戸忠太郎氏宅に講演を開く、前戸主、忠太郎翁の道善の爲特に開催す、竹内、成島二師出席。
五月十八日 片岡氏宅に於て、例の如く講演、成島、山岡兩師の講演、次に團員小川莊司氏は旅行中に於ける賞談を爲し、興味漫々、大に花を咲せ一同法談談裡に午後十一時閉會せり。
六月一日 東金町布力藏氏宅に開く、同夜は、成島、中村兩師の講演あり、午後十一時閉會、石井、前田兩氏も出席、次に中村氏次男より御遺文、立正安國師出席。

論講習を平易に爲す由。
六月二日 正氣村幸田小學校に會て、成島日衛師青年團の依頼に應じ講演を爲せり。盛會。
工場講話 山武郡横芝町出澤製絲工場は縣下三工場の一にして工女約二百、十有餘年前の創立にして工女の待遇も好く毎月二圓宛成島日衛師に依頼し講話を爲しつゝあり。

第參教區青年布教團通信 五月四日茂原町道布教、當日出演辯士は竹内、山田、山中、芹澤、岡本、森田の六名なり。六日日本年度に於ける第三回婦人會を味庄常光坊に於て開催す、出席者山木こと、倉上いち、稻子きさき、宅津木よね、竹内かね、山田みつ、海老澤ひさ、河野てる、長岡初枝の九名各自胸襟を開きて語り、午後よりは餘興として蓄音機數番あり、こゝに一日の清遊をなして各自別れを告げたるは午後五時過ぎなりき、尙當日は山木、竹内の兩師出席種々世話なせり、次回は七月岡所光明等に於て開催の答。
鳥取縣教報 四月二十九日、萩原本山部長は、有田銀井の二師を従へ、鳥取縣の櫻越市橋家の招請に應じ、午前八時二條驛發、保津川の急流を眼下に見て詩畫を豊富にす、駄句あり、初夏の日は飛沫走りて汽車の窓、瀧陽、保津川の筏あぶなし森青む啓蒙道人、山又山保津川青し赤とんぼ、啓蒙道人かく駄句りつゝ、八十一のトンネルを出て、は入り入りしては出て山陰に入り特色ある風光を賞しつゝ、午後五時松崎驛着壯嚴なる法要を慶修し、三十日夜講演、妙法蓮華經勸發品第廿八、萩原本山部長。

知見谷教報 京都府下北桑田郡知見谷本妙寺は實に山間僻處の一小寺なるが、住職大塚會叔師は、日經上人御法座後直ちに建立されし此靈場地を復興すべく苦辛なれど、あるが、本年は經師の三百遠忌に相當するを以て、京都より萩原本山部長、金光二師を招聘し盛大なる法要並に講演會を開催せり。兩師は四月廿四日午前六時二條驛發、九時殿田驛着、それより知見

谷までは五十丁一里にて八里の山道なり、二里はガダ馬車の便あるも餘の六里は人車馬車の便なし、二師は草鞋ばきとなりて、經師の往事を追懐しつゝ、海老坂峠二里の難所を進む、峠の頂上には多數信者の出迎あり、夕方本妙寺に着す、何分不便、爲從來布教に行く人も少なりしが、兩師の勇奮評判となり、三ヶ村の入口二里三里を遠しとせずして、集まり來り本堂立錫の餘地なく空前的盛況を呈せり、廿六日午前十一時より、萩原本山部長導師の下に法要を嚴修す、金光師は本多管長現下の慶談文代讀、大塚山主は野口監督布教師の慶談文と眞實文奉讀、次に講演に移る、開會の辭大塚山主日經上人と現代思潮を金光布教師、日經上人と勤王思想を萩原本山部長、何分久し振りのこととて求道の念一層篤く、夜は又信者の懇願によりて更に開講せり。當地に於て感すべきこと二三あるが、如何なる參詣者も、必らず先づ本堂に參拜し而して後庫裡の方へ來るの慣習なり、これは總に經師信仰の一端現はれて悦し、又小學校の生徒が門前を通る時、悉く皆禮拜して過ぐる等喜しかりき、大塚住職は、赴任已來九ヶ年間致々磨まず、布教に努力されつゝあるが、寺担協力して堂宇の大營繕をなし、又日經上人の紀念塔を建立せり、碑文は野口權大僧正の揮毫に成る、かくて日經上人の三百遠忌は、知見谷本妙寺先して執行せり、京都に於ては、久遠寺、本正寺、名古屋に於ては、常徳寺、靈山寺等大規模の營繕と紀念傳道の計畫ありと聞く、希くは全國經師並に五弟子の因縁深き寺院に於ては、特に盛大なる思想運動ありたきものなり。
我宗門の功勳者鳥取縣市橋藏氏は、不幸食道痛に罹られ、重態に付見舞の爲、本山在住の金光孝碩師、財團總長本多管長現下の代理として、去る五月十三日參向せられたり。(麗陽淡水報)

財團評議員會

四月十四日午前十時より財團本部に於て第拾三回評

むきにけり 三河島 西澤 明花
谷川にくたくる月のかけ見えてなつともなき
山かけの庵 雜司谷 矢野 浪子
夏の夜のうたゝねなから見る月のかけも涼しき
山かけのいほ 千葉縣 林 五子
つま木こるしつか袖やもへたてなく涼しくすめ
る夏の夜の月 千葉縣 江波戸あき子
岩間よりせきくる水に影さえて月はすむなり山
本のいほ 千葉縣 柳橋八重子
さゝしきに夏ともしらて奥山の暖か軒はに月を
みるかな 京都 中野 正甫
夏深く月を澄みける山里は木の間もれ来る風も
涼しき 千葉縣 福島 正之
忘れては秋かと思ふ山里の木の間もれくる夏の
夜の月 千葉縣 萬新舎一止
夏衣かさねまほしくなりけり月に月さゝぬ山
住の庵 下 總 星野 聖祐
立ち茂る松の木の間より打渡るゝつきにすゝし
き夏の山庵 千葉縣 醍醐 榮司
堪えかたきあつさも月のさやけさに涼しかりけり
山の下庵 千葉縣 笠見 榮也
なつの夜の月を友とし山の庵にすゝしくすめる
老の身の上 千葉縣 小川 蔵司
夕立のなごりの露にすゝしくも月そやとれる山
の下いほ 大阪 阪内 帆榮
すゝしきに夏をわすれて澄む月に秋かと思ふ山
住の庵 牛 込 日高 芳子
山庵に老ひを養ふ樂しさは文よむ窓に夏の夜の
月 千葉縣 堀江得一郎

教學財團兒童現金 領收報告

議長 鈴木 金 藏
書記 金光 孝 碩
○金七拾四圓也(大正七年四月廿八日)千葉縣夏目智誓
○金百貳拾圓也(大正七年十月十七日)千葉縣藤野覺寺徳
會談
○金四拾圓也(大正七年十月十七日)千葉縣太田萬光寺
檀家東原保
○金壹拾壹圓貳拾錢也 千葉縣宮城成寺中内譯金六
圓安川保、金壹圓小倉直太郎、金壹圓六拾錢南榮次、
金壹圓土屋俊次郎、金四拾錢宛吉井重三郎、吉井興一
郎、金壹圓廿錢吉井周藏、金壹圓宛藤代若吉、子安吉
松、金壹圓古川吉藏、金壹圓貳拾錢廣田清五郎、金貳
圓佐瀬清五郎、金貳拾錢藤田四郎、金壹圓宛小出竹次

○山庵の水の上わたるそよ風にすゝしくすめる夏
の夜の月 千葉縣 堀江 誠杖
静かなる深山の家に灯の見えて松のしづ枝に夏
の月出づ 高 岡 古谷孫右衛門
○溪川の岩根にむすぶかり庵のながめを添ふる夏
の夜の月 千葉 堀江 はし
○おく山の清水にうつる月かけは夏なき庵のたか
らなりけり 京都 有田 麗陽
○人里を遠く離れし山かけの庵にすゝしき夏の夜
の月 京都 有田 信子
○人里はかすかに見えて山庵にさやかにてらす夏
の夜の月 京都 有田 健山
○軒端もるかけもすゝしき夕月のひかりさし入る
山かけの庵 福 岡 熊澤 優子
○寝なかにすゝしきよ半の月かけを山家にみるそ
うれしかりける 金 澤 窪田 純榮
○そひへ立つ深山の庵になつながらすゝしき夜半
の月をみるかな 白 山 松尾 周子
○山の庵はたにの流のきこえてすゝしき月のう
つりけるかな 旭 川 法谷きよ子
○運れたる山家の月の涼しさに憂世の夏もわすれ
はてけり 千葉縣 渡邊 乾航
○山住の身には衣も何かせん月を友なる夏のうれ
しさ 白 山 松尾 清明
○追 加 選 者
ほとゝきすこゑもさやけき月かけのすゝしくてら
す山かけのいほ

郎、田中直吉、小倉角太郎、金堂四拾錢遺田卯之助、金四圓八拾錢田佐吉

○金五拾圓也(大正八年三月廿日)宇都宮市寺町法華寺檀家中、石田常造、石綱弘藏、倉田直吉、加藤源七、猪俣藤七、猪俣藤八、君島善之助、大垣鈴次郎、青木啓、猪俣藤吉

○金拾六圓也(大正八年三月廿日)千葉縣北塚寶光寺檀家中

○金五圓宛岡山市二日市町高木登久女、高木利宇

○金七圓四拾錢也千葉縣津村安立寺檀中、内藤、金武岡宛森勇吉、森德次郎、金堂五拾錢高山吉太郎、金六拾錢森丑松、金貳拾錢宛、森皆二郎、森庄藏、高山治郎作、下道淺吉、金拾錢岡吉五郎吉、向與助、關豐吉、森豐吉、林常三郎

○金貳拾圓也(大正八年三月十四日)宇都宮市法華寺檀中

○金七拾七圓八拾錢也(大正八年四月廿二日)千葉縣寶泉寺夏目智賢撰

○金壹千圓也(即納)靜岡縣吉美妙立寺檀家豐田伊吉

●神奈川縣通信 五月二十七日橫濱門山有道俱樂部○六月一日橫濱公會堂にて三上義徳師は、大日蓮主義を宣傳せり。

●大阪監督布教 十九日蓮成寺堂法會を兼ねて講演會開會す。野口觀下は「日蓮主義より觀たる新思想の位置及び價值」を講ず。前席、有田宏道、川崎英照○十三日例會講話。廿六日小林倉三氏宅にて上田智量講話。

●名古屋布教報 七日夜、妙行寺にて、草切信榮、清水一乘講演○八日夜、常樂寺にて草切信榮、清水一乘、國民思想と日蓮主義を國友日斌○十日、靈山寺にて大口全三郎、草切信榮、清水一乘講話。

●四日市教報 十五日、日蓮上人の大主張を草切信榮。

大阪本化聖教團の設立

今同團設立と共に左の報告ありたり

我々大阪市長の發議により、市内佛教各宗に於ては佛敎聯合會を創設し、市の教化事業に盡す事となりしが、我門下七教團に於ても、大阪本化聖教團を組織し、別紙覺書申合書開現書等の主意のもとに之に加入する事となれり。かくて七月二日午後東區谷町八丁目長久寺席に於て池上市長小幡下川兩親學を聘し、七教團五十九ヶ寺各布敎師等相集り盛大なる發會式を舉行し、日蓮主義宣傳の爲めに大氣勢を擧げたり。

因に當日の式次左の如し

一、團員各自書名捺印

第二報 市長並に團員の着席

第三報 式辭朗讀安國論拜讀唱題

第三報 市長の祝辭 (以上撤式)

開會之辭

市長挨拶

市長挨拶

紀念攝影

覺書

一、市としての大體方針(教化事業)に對しては各宗同一步調を採ること

二、各宗聯合布敎の場合には市備及び個人に於ける布敎講演は總て各宗にて互に其敎誨信條を中心として宣傳すること承認する事

三、本團は教育事業として敎團聯合の女學校を設けること

四、本團は慈善救濟部を置き從來計畫を擴張すること

次覽「濱風」

▲和歌は必ず月末着にて御投稿下さい、一日朝選者閣下のお手下に送りますから、此以後着の分は遺憾ながら選に洩れることになりません。一ヶ年の課題は既に二回まで豫告しあることですから御奮發を冀ひます。

「新涼」

新涼の川魚速き流かな 出雲 石橋 芳夫
 新涼や竹に聲あり文の意 上 總 四本 篤谷
 新涼や梁におどれる魚の色 同 同 三 江
 新涼や廣田に響の見ゆる朝 同 同 同 木 村
 抱く子の尿に涼も秋を知る 長 門 萩 村
 新涼や夕陽湖上の雲色む 高 岡 古 谷
 新涼や蜘蛛の巣白し夜明空 淺 草 山 中
 新涼や柿の露も白し夜明空 上 總 伊 藤 秋 山
 新涼や櫻の嵐も霞も哀へぬ 上 總 伊 藤 秋 山
 新涼や神社の杉の梢より 丹 後 原 孝 友
 新涼や蛙と蛇のみにみ合ふ 市 外 立 川 金 峰
 山に隔て新涼歸途の名残哉 三 河 島 西 澤 明 花
 新涼や一雨過ぎし竹の庭 牛 込 芳 田 麗 陽
 蟬一落と涼風立ちにけり 京 都 有 田 麗 陽
 星さえて涼しく渡る稻葉哉 上 總 鴨 田 麗 陽
 新涼や風の邊り來て寫經の灯 上 總 鴨 田 麗 陽
 新涼の魚皆淵に躍りけり 上 總 鴨 田 麗 陽

「走馬燈」

新涼の松の根洗ふ清水かな 同 同 同 同
 うたふ聲の破れ新涼を覺えけり 同 同 同 同
 新涼や湖村邊り處士の家 淺 草 同 同
 新涼や庭の葉末の雫より 同 同 同 同
 新涼や天井に釣りてある紙の鶴 同 同 同 同

「走馬燈」

走馬燈因縁古き物語り 理 蕨 子 蕉 溪
 蚊柱も見えずなりけり走馬燈 同 同 同 同
 釣針を懸かへにけり走馬燈 同 同 同 同
 走馬燈叱り顔なる親父哉 同 同 同 同
 走馬燈七五三懸かけし釘に釣しけり 同 同 同 同
 浴室の窓へ廻り燈籠哉 同 同 同 同
 山莊や木の間に透きて走馬燈 同 同 同 同
 廢れ行跡の行事や走馬燈 同 同 同 同
 走馬燈留守居の母に静かなり 同 同 同 同
 年毎に走馬燈つる駄菓子店 同 同 同 同
 配達に續き嫁入や走馬燈 同 同 同 同
 走馬燈や雨に合せて泣子供 同 同 同 同
 追つけぬ捕手人数や走馬燈 同 同 同 同
 酒座逃げて酒燈籠の下横臥哉 同 同 同 同
 走馬燈庭奥深く清水湧く 同 同 同 同
 釣り込まれ祖母も座に着く走馬燈 同 同 同 同
 ▲子は寝ねて廻り燈籠の覺東な 同 同 同 同

五、市内の公會堂又は各學校及市内便宜の官民所有地を利用して一般の爲め時々精細講話會を開備する事

六、青年會在郷軍人會及び市内各種産業組合等講演開備の場合に出席する事

七、本團より知事官宅に救済研究會に出席し、及び各種婦人會十日等上流階級者の集會に講師を出演せしむること

八、本團員の市の方面の委員と連絡して下級労働者の清況を觀察し便宜の方法を以て(物質と精神)思想改善善道觀念の涵養に盡力すること

九、市内に於て多数の使用人を有する工場會社商店等の休暇日に其主長たる者自ら率先して寺院に參拜し又は各自の會宅に於て宗敎講話會を開備することを奨励す

十、敎育家と宗敎家と時々懇談會を開き宗敎敎育の調和を計ること

十一、毎年二回敎團の布敎報告統計表を作製し市長に提出すこと

大正八年六月五日 大阪本化聖教團

日蓮門下七教團申合書

一、本團は市の敎化政策に對し敎團として時々大舉傳道を開備すること

二、本團は市の敎化事業に對し別紙覺書の主旨に依り直に各項の實行に着手すること

三、敎團主催の場合に於ては布敎場を相互に開放し敎師は相互に出席すること

四、敎團として毎年釋尊降誕會及涅槃會を虔修し布敎講演を開備し社會風敎の改善を計ること

五、各敎團は毎年宗祖の四大法要を嚴修し日蓮主義を鼓吹し國民思想の統一宣傳をなすこと

六、敎團の服制は布敎の際には布敎服に茶色白紋の折五條を着用し法要席は黒居士衣に紫紋の木五條着用のこと

七、敎團聯合の法要は方便靈驗神方御遺文問題のこと

但し時機に依り便宜省略することあるべし

八、敎團の團旗及提灯を一定すること

九、本團に評議員十二名(内單稱五名)理事九名常任理事二名會計二名庶務二名を置く

評議員 (イ)ハ(順)

大阪府北區木幡町 法華宗夕願寺住職 大竹法嚴
 同東區西高津中寺町本妙法華宗福泉寺住職 織田契全
 同同谷町八丁目 日蓮宗長久寺住職 鎌田潮音
 同同西高津中寺町本妙法華宗蓮成寺住職 上田智量
 同市外 傳法町日蓮宗正蓮寺住職 山村憲善
 同北區末廣町 日蓮宗成正寺住職 山村眞立
 同同東區西高津中寺町本妙法華宗木覺寺住職 矢田智玄
 同同同 日蓮宗開妙寺住職 深川觀察
 同同同 同妙像寺住職 有光友靜
 同同同 同同 信隆日秀
 同同同 同同 鈴木孝孝

理事

大竹 法嚴 織田 契全 上田 智量
 山村 眞立 矢田 智玄 福原 日事
 深川 觀察 信隆 日秀 鈴木 孝孝
 常任理事 深川 觀察 同 織田 契全
 正會計 信隆 日秀 副會計 有光 友靜
 庶務 志津 水眞誠 同 長井 辨順

考

本門宗五ヶ寺、本門法華宗九ヶ寺、法華宗五ヶ寺本妙法華宗一ヶ寺、顯本法華宗二ヶ寺、法華宗一ヶ寺、日蓮宗三十五ヶ寺、日蓮正宗一ヶ寺、合計 寺院數五十九ヶ寺

大阪本化聖教團々則

第一條 名稱 大阪本化聖教團と稱す

第二條 位置 事務所を大阪府東區谷町八丁目長久寺内に置く

第三條 目的 異體同心の祖訓を遵奉し本化の風敎を

俳句短冊進呈

出雲の石橋芳夫氏から松尾主筆へとして「私の希望とし三光は短冊を送られ、且つ俳句も二三人へ先生の短冊を送られるやう」云々と申し越されました。統一俳句は別に三光或は十内と云ふやうな形式は成るべく探らぬつもりで折角御忠告の次第もありますから、御交際の記し拙句とを推した短冊を以後◎印を附した方に進呈致しますせう

女號「鬼灯」(ぼんぼり)「蟬聲」

山村 峰 花 女 村 夫 江 村 山 友 峰 子 蕉 溪

- 第四條 宣揚し世界國民の信仰思想を教導し開導統一の聖蹟を實現するを以て目的とす
- 第五條 別項聖教團申合せに準じ各種の事業を遂行するものとす
- 第六條 團員大阪七教團寺院住職者を以て團員とす
- 第七條 團員 團員より毎月金壹圓づゝを徴集す
- 第八條 役員 評議員拾名(内單稱六名)理事三名 任理事二名會計正副二名庶務二名を置く
- 第九條 評議員は會員中より選舉し本團の重要事項を議決す
- 第十條 理事は評議員中より互選本團の事務を處理す
- 第十一條 常任理事は理事中より互選し開導を實行す
- 第十二條 會計は評議員中より互選し金銭の出納を掌る
- 第十三條 庶務は理事會に於て之を推選し諸般の事務を整理す
- 第十四條 任期 役員は任期は總て一ヶ年とし再選することを得
- 第十五條 會議本團は毎年一回總會を開き評議員會は毎月一回とし必要の場合臨時之を開會す
- 第十六條 附則 評議員三分の二已上の賛成するに非んば變更することを得す (以上)

監督布教日誌

權大信正野口日主師 隨行員 川崎英照

戦後の日本に健全なる國民思想を涵養すべく四月上旬東京を出發せられたる監督布教團野口日主師は、東海道豐橋を始めとして、京都、姫路、岡山、廣島縣、九州一圓、長門を経て山陰道に東に向ひ、海陸の不便と戦ひつゝ五月十四日伯耆松崎に着せらる。之より先き子は松崎に着し、偶々京都本山より市橋龜藏氏の病を見舞ふべく來れる金光布教師と共に、倉吉町公會堂に於ける日蓮主義者の主催せる講演會に望む。日は十四日午後二時、

一開會の辭 廣瀬信光
一宗教の必要と其發揮 川崎英照



(照參報教州九號前) 師應通原 中左。師權俊野紀 右てつ向。師主日口野 央中●

一家庭教訓と法華經 金光學碩
三時間に亘る講演に二百五十餘の聴衆は、地方有力者

一、怒濤逆巻く 深澤孝
七字の題目 其の中へし
靜に立つて 誦しむたる
之れぞ末法 導師なる

二、そも日蓮と 佛の告勅 止みかたは
漢世の衆生を 三類の難 身に受けつ

三、既に去ぬる 八年九月 文永も
身に一分の 龍の口にぞ 召し出さる

四、豫て存知の 泣き崩れける 我が弟子に
笑へよかしと 師子王のごと 叫びつゝ

五、二つとは無き 毎白の悲願 命をば
諸經の王に 五十路の齡 捧げては

六、喜ばしいかな 露つて得し 吾が首を
父母に願向し 弟子檀那等に 功徳もて

七、風雲一團 實に三徳の 其の餘をば
大覺世尊 宿はしませ

八、死罪逃れて されど此背の 影清し
如何に〜と 熱涙をば
御弟子に曉ぐ 隔て行く

九、宵 瓊千里 絶海孤島の 果までも
師弟の情は 百山萬波 貫けり

十、晝夜に沙汰する 順逆二縁 法門は
身命賭して 木化の靈光 幾世までも

の會合にして六時閉會せり、同夜松崎本立寺に開會す

一開會の辭 津村俊乘
一信は力也 川崎英照
一教のの教 金光學碩
一思想問題と四恩義 野口監督布教師

同夜は本立寺に一泊し、山陰布教師として將來を囑望せられたりし故朝倉俊達師の墓を典し、翌十五日東郷村に教學財團理事長市橋龜藏氏の病氣を訪ひ、午後島取市に向ひ、三時より立川町法泉寺に於ける島取地明會の講演に望む

開會の辭 中島孝治
精進修養と模範人物 金光學碩
信は力也 川崎英照
日本婦人の修養 野口監督布教師
山陰の寒風雪を添へて窓をうち、二百の聴衆殊の外に緊張せり、同夜七時より天晴會の公演を開く

思想の戦 川崎英照
新思想の批判及び日蓮主義 野口監督布教師
會長田中大佐を始め地方有力者の會するもの三百餘名、多大の感動を興へたり、其夜島取温泉旅館に一泊し、清談夜を叙し、翌十六日島取縣を多數の人々に送別れに出發、車中山陰の新線を賞しつゝ和田山にて幡但線に乗り換へ姫路に出て、更に山陽線にて寶殿驛に下車し、夜の十一時志方妙信寺に着し一泊す、翌十七日午前八時より遠路より集る純信徒の爲めに

日蓮聖人の信仰 川崎英照
活ける信仰と活ける修行 野口監督布教師
講演終つて晝食後直ちに明石に向ふ、其夜七時半より圓乘寺に橋香會四周年紀念講演會を開會す

國民の人格的向上 川崎英照
午後五時より電車にて兵庫に着し同夜布教所に於て將來の宗教と思想の結晶 熊井本光
聖日蓮の思想と現代 川崎英照
デモクラシーと國民性と日蓮野口監督布教師
其夜布教所に一泊し、翌十九日午前九時より兵庫三菱職工學校生徒百五十名の爲めに左の講演をせられたり

精進修養に就て 野口監督布教師
午前十一時半の汽車にて大阪に着し、多數の出迎を受けて自動車にて蓮成寺に至り、午後二時より婦人會の爲めに

活ける信仰 川崎英照
同夜公開講演を同寺開く 有田宏道
國家と宗教 川崎英照
思想の戦 野口監督布教師
日蓮主義より觀たる新思想の位置及び價值

講堂の聴者法雨に浴して十時半散會し一夜を歡待に明し、翌二十日村上、野阪、長尾等の信徒に誘はれ箕面に新線を賞す、神戸より熊井師と參加して一日の清遊に旅の勞を慰し、同夜堂開寺の國民思想講演會に望む

開會の辭 川崎英照
才能ある禽獸とは誰ぞ 野口監督布教師
日蓮主義により觀たる煩悶 野口監督布教師
相馬、松田其他信徒の小宴清談の時を遷して、翌二十一日雨を冒して堺妙満寺に至り、堺護正會の發會式を擧げ、同夜講演會を開く、予は兼任地の故を以て開會の辭を述べ、

圖佐渡 一八
福國縣飯塚町立岩 麻生炭礦病院にて

信は力也 川崎英照
宗學と日蓮上人 野口監督布教師
開會の辭 金光學碩
彩色に勝なきが如し 川崎英照
日蓮主義より觀たる新思想の位置及び價值 野口監督布教師

翌二十三日午後京都寺院及信徒有志の發起にかゝる慰勞會あり、一同歡を盡して將來法國の爲め活動すべく約して散會せり、かくて野口權大信正は二十六日出發越前加賀越後の巡教を終へて三州豊橋に出て、立正會の爲めに講演し、地方寺院の慰勞の宴に臨みて六月上旬歸東せられたり、長期各地に於ける講演は時節柄國民に大警醒を興へ、多大の成績を擧げ得たる事を信ずる也。終に望み各地の方々に對して歡待の好意を謝し併て益々諸氏の健康と奮闘とを祈る、合掌。

●京都通信

京都本山妙満寺にては萩原部長、銀井乾舟、金光孝順、有田安道、三好信道等の諸氏等相携へて布教運動に熱注。一日は國語會▲二日夜は護正會にて萩原部長の當體抄の讀誦あり▲八日夜は大慈院にて婦人會乾井氏の法話▲同晝は成道院にて護正婦人會、有田氏の法話▲同晝は妙満久遠寺にて常正修養會、三好、金光、萩原三氏の法話あり▲九日夜は北村宅にて同會例会、萩原龍雲、銀井二氏法話▲十日日本正寺にて婦人會、金光氏法話▲十三日晝、本山にて宗親會例会、人は自覺を要すの題にて萩原日道氏▲十五日晝は明徳學園にて同會例会、佐竹憲教銀井の二氏▲十六日晝は法光院に妙光婦人會、金光氏信仰と實生活▲十八日夜は本山講堂にて三好、有田、萩原三氏講話▲同晝は法光寺にて今井乾草、萩原の二氏▲二十八日は本山開山會例会、銀井氏法話ありたり。

●名古屋教報 六月七日妙行寺にて法話、草切信榮、清水一乘二氏▲八日常徳寺にて同、小島常賢、草切、清水の三氏▲十日靈山寺にて改道と信仰を草切氏、宗教的信仰を清水氏。

●堂閣寺教報 大阪にては六月二十二日、健全なる宗教と國家觀念を京藤義隆氏、法華經要義を上田布教師▲二十二日國民思想と國家の興廢を京藤氏、金剛の鐘を用崎布教師▲二十五日中野宅に京藤氏出演する。

●堺妙満寺 六月二十一日日蓮主義の人身觀を京藤氏、人事の解決の鍵は我が手にありを用崎氏何れも演了。

●伊勢四日市 五月十五日四日市市種之町分團教場にて於て講演會を開く、草切信榮氏出演▲六月十五日は清水一乘氏出演する▲同地は會毎に來會者を増しつゝあり。

●金澤教況 六月十六日天晴分團講演會を始坂町本長寺に開く、盛照玄氏開會の辭、窪田純榮氏信念の受持を、吉倉水央氏思想問題に就てを述べらる▲二十一日同本長寺、及び二十八日日本行寺に何れも窪田氏出演

を爲し同氏發聲聖上の萬歳を三唱して閉會、同夜那長蟹町長篠原海軍大佐等多數の知識階級の來觀あり。

十日午前野口權大僧正大導師として維所已降職死病沒大法要を修し、遺族の爲に野口、中川兩師の懇篤なる説教あり、同夜第三回思想講演を開き。

●知法恩國の叫び 紀野俊輝師
●宗教選擇の標準 文學士 中川日史師
●曼羅木算示現と修養 權大僧正 野口監督布教師
●熱誠なる講演は深き印象を聽衆に與へたり。

野北中佐發聲聖下の萬歳を三唱して閉會、引續き妙満寺客殿に於て秋日蓮主義研究會主催の講師慰勞會を開き、世良醫師研究會を代表して謝意を述べ、紀野、中川、野口各講師の所感演説あり、同夜小田醫師の新入會あり(是にて研究会員中刀圭介の新進者八名を算するに至れり)各自款を盡して野口權大僧正の發聲にて萬歳三唱散會せるは午前一時、實に兩日四回の大喇叭は近き將來に益々發展域に近しむべく新しき努力を生みたりとひふべし。

●能仁僧正と北海道巡教

同山の能仁事一僧正は過日子都宮市の講演を終り、直に北海道に對はれたるが、目下樺太島にありて盛に妙化に盡されつゝあり、今七月三日樺太日日新聞に掲げられたる同師の消息を得れば此に轉載す。

●精神修養講和

京北地方及北海道に於て民力滋養、社會教育講演に巡回しつゝある僧正能仁事一師は東京帝國大學々生金島英夫氏を隨へ二十八日來町し廿九日午前樺太廳に出頭し永井長官及び城間警察部長と打合をなし當地の講話日割を定め既に大倉乾所並に産業株式會社にて三回講演をなせしに同師は特に労働問題に造詣深き事として多大の感動を與へられたり。左の日報

●天晴會 六月二十八日午後四時より統一間に於て閉會、危險思想と其背景の題下に文學士小林一郎氏講演する。

●備前和氣通信 六月十五日は婦人會、同信會、二十七日は通夜講演會▲二十六日原田日勇、新莊信敬の二氏和氣郡明徳會(免因會)代表として岡山監獄訪問談話する▲二十八日は夜間本山行寺にて講演會、町田光氏開會の辭、田中正吉氏現代を超越せよ、原田氏は文明の恩潮に對する東洋の宗教を述べらる。

●統一問 毎日曜日例の如く例會あり、毎月一日は午後一時より自勵會ありて労働者の慰安指導をなす。又青年會、こども會、茶話會など何れも盛會なり。

●身讀會 七月一日例の如く閉會、松尾外務文等の諸氏講演。

●統一團小石川支部 六月二十四日駕籠町七後藤龜五郎宅にて、壽土井村氏野澤氏なりき。

●妙顯寺講演會 下谷池の瑞妙顯寺にては去る七日夜、住職木村義明、松尾波城、野澤少將等にて講演會を開けり。

●美作通信 美作津山教壇六月に於ける活動史左の如し▲日蓮主義説教日 二と七の日の六回一教信徒の集合にして修法の後能仁一十所の説教あり▲十五日晝は日蓮上人一代記幼燈會を松原ラムネ會社にて開演す、立教開宗より伊豆東流流瑞彰寫影、能仁一十説明す。▲通俗講演會、上ノ八八會主催の精神修養講演會に能仁一十師出演、此日餘興として教育人形芝居等もありて盛會なりき。

●山田三郎博士送別會 博士は今屆歐美巡遊の途に上らるゝには佐藤小林宮閣矢野の諸氏發起して去る一日日蓮宗務院にて送別會を備したり。

●青年自省會保立 品川に斯會設立されたり。

●千葉縣通信

▲講和祝賀講演會 君津郡金田村中島本永寺にては七月一日歐洲戰亂後我戰役者追弔法票を替み且つ講演を爲す壽土秋葉純一氏なり。

▲妙善寺報恩祝儀修法 山武郡豐成村同等に於ては五月七日皇太子殿下御成年式祝賀と稱御降臨とを兼て法票を讀修せしむ。

▲廣部乾山師 阿氏は三月二十二日眞鏡淨茶寺にて、四月十五日西野善立寺にて、十九日小沼田本永寺にて、五月八日淨茶寺にて二十九日同寺にて六月九日同寺にて何れも事に因める法要あり其後何れも法話をされたり。

●第參教區青年布教團教信 六月九日、茂原市なる幸ひ道路布教團催し、出演壽士に河野見中、長岡育應、竹内都願、山田誠心、森田會正、岸澤志正の諸師各々熱辯を揮ふ。▲二十四日夜は飯尾寺緣日なる幸ひ午後七時より、修法の後、山主開會に次ぎ、山田、竹内、長岡の順序にて開教十時半閉會す。(竹内生報)

●秋思想大講演會教況 本春細野旅團長と共に念佛門の眞唯中に日蓮主義の大喇叭を成立し、空前の成功を得たる秋日蓮主義團は、本月九日十日兩日野口監督布教師及中川文學士の兩師を招き、大活動すべく前月未より九州各地の思想講演に活動せる紀野師は歸萩と共に主義者を勵まして準備に努むり、九日午後一時より劇場露座に於て

精神文明に於けるデモクラシーの價值主備者

●精神國防 紀野 佐 雄
國民自覺の秋 中川 文學士
思想問題と日蓮主義 野口 權大僧侶
基督教徒の反對ありて活動場に満ちたり、講演後講師一行は自動車にて妙顯寺に入り、同夜各講師、懇話ありて非常に盛會にて、國武郡長岡村勇二氏は所感演説

●台中教報 村上乾淨、松鶴天龍氏等の宣教は五月六月共に十餘回の講演會を催し、又砥橋公學にては公開講演をなしたり

●青森地明會と能仁師 能仁師の來青を機とし大會を開き頗る盛會を極め、晝間は大林區署、夜間は中島三層樓上に於て講演されたる由なり

によりて各方面の講話をなし、五日鎮路丸にて歸途につき青森盛岡市にて講演の上十日東京顯本法華宗本部へ向け歸京の由

▲六月三十日(正 午) 大倉乾工場
▲七月二日(午後七時) 産業會社乙俱樂部
▲同 日(午後七時) 産業會社乙俱樂部
▲三 日(午後二時) 高等女學校講堂、外各小學校職員一同
▲四 日(午後三時) 大泊産業會社
▲同 (午後七時) 大泊産業會社
▲五 日(午前九時) 大泊中學校

●寄贈金領收報告

一金五圓也 東京 久富 久子殿

一金拾圓也 神戶 牧 準一郎殿 牧 忠馬殿

右は故父公の菩提の前に

一金參拾圓也 横濱 多田房太郎殿 磯部 満事殿

●店員入用

店員十三歳より四五六歳迄の者五六名入用御世話被下度候

京都市三條通小橋西入

三法堂 藤田 總治

●店員入用

店員十三歳より四五六歳迄の者五六名入用御世話被下度候

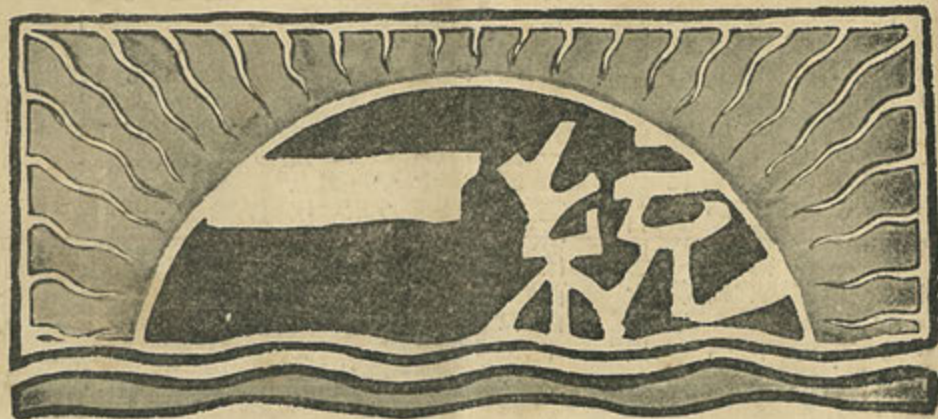
京都市三條通小橋西入

三法堂 藤田 總治

●日原法衣專門 青雲帽 青雲帽 青雲帽 青雲帽 青雲帽

飯田法衣店 京都市佛具屋町五條北 振替口座大坂六八七四

定價表ハ御申遊次第 何時でも御道中ハ候



(號四十九百二第)

勇猛精進(續)……大僧正 本多 多生 機微譚語九二福翁訓戒……子 正 山根 青村
 日蓮聖人教義綱要……僧 正 井村 日成 夏と樺太……子 正 能仁 事一
 新思想と國民の決心 侯 爵 大 井 限 重 信 和歌「濱風」……子 爵 清岡 長言選

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
 大正八年八月十五日發行(毎月一冊十五日發行)

布眼藥 效能、たゞれ目、かすみ、ち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホーム等
 定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八拾錢、壹圓、

血の藥 定價壹袋、拾錢、貳拾錢
 田産後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣絶、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、千葉縣山武郡源村上布田參百番地 藥王寺

布眼藥 本舖 齋藤 日章
 田血の藥 (御注文は總へて下記振替に)
 (振替東京第六七九一番齋藤日章)

念珠ならば小野嘉助店へ
 日蓮宗各本山御用達
 顯本法華宗妙滿寺御用達
 ●御念珠各種
 弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候

京都市寺町通藥師下ル
 念珠 小野嘉助
 電話 中二六〇八番
 振替口座大阪一九七二〇番

●初も佛具を調製する敬虔心を以て奉仕候●

佛像佛具 調度所
 位牌木鉦 宮殿幢天蓋其一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
 總本山妙滿寺
 大本山本國寺
 日宗各教團
 京都寺町四條南大雲院前
 舊名「乾清」事
 大佛師 辻井岩次郎
 振替大阪八一五七番
 電話下三二五八番
 多少に限らず御用奉願上候也
 ●御用仰せ被下候は、町呼吸切を旨と致候●

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 直に御聯想下され候儀に候

京都 三條通烏丸東入ル町
草木本店
 電話 中七三五番
 振替口座東一二五五九番

東京淺草區三好町二番地
草木支店
 電話 下谷三四三四番
 振替口座東京二四五六八番

佛像佛具 大販賣所
 位牌木鉦 宮殿幢幡天蓋其一式
 ●各大御本山御用達
 御來店の節は陳列場へ御來車被下度は迄とは一層勉強仕り莊
 馳品一式陳列仕置候

郵税四錢
 定價表ハ御一報
 次第送呈可仕候

小賣部 京都三條小橋東入南側
三法堂佛具陳列場
 長距離電話中貳七八參番
 振替口座東京貳〇七壹
 大阪四貳五九

卸部 京都市三條通小橋西入
 本舖 三法堂 藤田總治



統一團支部設立廣告

今や思想界混亂して適歸する所に迷ふ。此際混迷を導いて光明の天地を開闡するもの夫れ誰の力ぞや。我統一團設立して茲二十有餘年、斯間主義を宣傳し、時代の思潮を導きしもの聊か所信あり。近來日蓮主義を叫ぶ聲熾盛を致す亦之れ是れが因由ならずんばあらず。然りと雖も吾人をして謂はしめば斯の如きも尙希望の萬一に及ばず寔に前途洋々の觀なくんばあらず。此際我同志奮然一層の努力を要するものあり。於是、我統一團は別に統一團擴張會を設け、本多親下を總裁に、井村師を總務に、而して我誌同人之れが主任となつて全國に對して少くも數百個所の支部を設け、擴張委員を置いて大に團勢を張り、毎年季節を定めて本部より講師の出張講演を爲し、以て國民教化の大舉運動を爲さんとす。讀者數人を有する所即ち支部の設立を爲すに足る。志寄特の士、我統一主任まで一報あらんことを祈る。(松尾生)